様式1

令和６年度　学校評価表

学校教育目標	感謝と貢献

a　ミッション	地域の教育力を生かした御調プライドを醸成する教育の推進	a　ビジョン	○ 安心・安全で、生徒が夢と志を抱き、心豊かに生き生きと活動する学校 ○ 自ら学び、考え、判断し行動する生徒を育成する学校 ○ 心豊かに、自他を尊重し、共に学び、高め合う生徒を育成する学校

尾道市立御調中学校

評価計画						自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	1月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	k 二次評価 ロ	k 二次評価 ハ	l コメント	m 改善案
御調クロスロード（時間軸と空間軸）	未来につながる基礎的な学力の育成	定期試験、週間課題の小テストの正答率の向上	○基礎学力の定着への取組の工夫 ・「週間課題」の実施 ・「学力アップ講座」や「補充学習」の実施。（「学力アップ講座」については、前回の定期試験の結果が30点未満の生徒は指名して実施）	・1、2年生　1学期実施の学力調査と3学期実施の学力調査において、正答率の全国平均との差	前回の結果より上回る	－	50%	50%	D	・１学期実施の学力調査では、全国平均との差が１年生５教科平均-1.3ポイント、２年生５教科平均-12.5ポイントであった。３学期実施の学力調査は１月に実施し、全国平均との差が１年生５教科平均-6.1ポイント、２年生５教科平均-8.8ポイントであり、1学期の結果と比較し、１年生は下回り、２年生は上回った。	7	1	2	・補習を行うなど、生徒の学力向上、学力を身に付けさせようという取組が増えた。 ・教職員の表情がよくなってきている。 ・基礎学力が定着していないというのは、何年生ぐらいでつまずいているのか気になる。個別指導のとき、本人の学力に応じた指導が必要ではないか。 ・１年生の結果が気になる。学習内容が難しくなり理解できなくなっている生徒が増えたのなら指導方法の改善も考えないといけない。 ・７月より状況が良くなっていない点でＡ評価は適正ではない。学習支援の取組に今後も力を入れていただきたい。地域もより協力体制を作りたい。 ・小テスト不合格者が固定化してしまうという点への改善策が早急に必要である。 ・個別支援は、生徒への自信につながるので、継続してほしい。 ・全国平均を上回った人数の割合の方が知りたい。 ・学習は個人もしくは家庭の責任の方が重い。 ・小テストの合格率は伸びているはずが、定着を考えたときにできているかと言えば難しいのではないか。 ・小学校においてどこまで学んできているのか、課題は何かをつかんで指導していかなければ成果を出すのは難しい。 ・学力低位の生徒に対しては、長期休業だけでなく日常的に指導・支援する時間が必要である。その際、高校生や先輩や同級生が支援する方法も考えてみて欲しい。	・補充学習を継続して行い、基礎学力の定着を図る。 ・授業改善として、本時の流れを黒板等に掲示し、生徒が見通しを持って授業に取り組めるようにする。 ・授業改善として、生徒の主体的な学びが促されるように、生徒に発表させる、ペアやグループで話し合わせる、黒板の前に出て書かせる、音読させる等、生徒の活躍の場を増やす。 ・基礎的な学力の定着を図るため、帰りのHRの開始前5分間を帯タイムとして、ドリル学習等を行うことを検討する。
				・週間課題の小テスト（覚える系）の合格率	８０%	81%	79%	99%	B	・週間課題の小テストの合格率は、１年生74%(1学期82%)、２年生80%(1学期77%)、３年生82%(1学期85%)、全校平均79%(81%)であった。目標値はほぼ達成はできた。しかし、固定化した不合格者への対応が不十分であり、取組の改善が必要である。					
				・定期試験の正答率が30点未満の生徒の割合	２０%以下	14%	16%	125%	A	・定期試験の正答率が３０点未満の生徒の割合が、１年生19.1%(1学期9.8%)、2年生17.7%(1学期22.5%)、3年生12.2%(1学期10.8%)、全校平均16.4%(1学期14.4%)であった。目標値は達成できた。２年生は1学期と比較し減少しており、補充学習等の取組の成果が見られる。一方１年生は1学期と比較して大きく増加した。生徒個々の課題を捉え、個人に合った指導・支援が十分ではなかったからだと考えられる。基礎学力が定着していない生徒への個別の学習支援の継続が必要である。					
	人とのつながり、関わりを大切にし、健康的に生きていくカの育成	生徒相互の関わりによる自己有用感の涵養	○縦割り活動・生徒会活動の充実 ・縦割り活動の設定 ・各委員会キャンペーンの実施 ・ボランティア手帳の活用	・「自分にはよいところがある」と答える生徒の割合（昨年度72%）	85%	78%	79%	93%	B	生徒アンケート項目「自分にはよいところがある」「自分のよさは周りの人から認められていると思う」の２項目における達成値は79%であった。学年別で達成値をみると、１学年85%　２学年68%　３学年82%であった。１学期と比べると、１学年は7ポイント増加したが、２学年の数値の低さが継続して目立つ結果となった。人間関係づくりなどの取り組みを仕組み、共感的な人間関係の構築が必要であると考える。	8		2	・「自己肯定感」「自己有用感」という言葉の意味を、もっとわかりやすく伝えるとよいのではないか。 ・生徒が自信を持ちにくい状況があるのではないか。自信のなさの表れが授業中にも出ているのではなか。 ・地域でのボランティア活動にも積極的に参加してもらいたい。 ・人間関係の構築は簡単ではないので、日々の様子を見て、しっかり認める声かけが大切である。 ・ボランティア活動に参加したときの感想を伝える等の取組も効果があるのではないか。 ・役に立っているという評価のハードルが高いかもしれない。 ・縦割り活動・生徒会活動の充実も大切だが、授業において生徒同士の関わらせ方、ＨＲ等での関わらせ方の工夫も必要である。 ・ボランティア活動に関しては、外国人就労者への日本語指導やゴミ拾い活動など、地域にも色々ある。	・まずは教員が校内研修を通して「自己肯定感」「自己有用感」の意義、涵養させる意図について学び、共通認識を持ったうえで生徒に伝える。「自己肯定感」や「自己有用感」の言葉の定義や具体例を生徒に伝え、教員と生徒で共通認識を持てるように指導する。 ・地域で行われているボランティア活動の年間スケジュールなどの情報を収集し、積極的に学校から発信し、生徒の参加を促す。また、参加した生徒の活動報告の場を設け、ボランティア活動の素晴らしさを広める。 ・日々の授業やHRの中で協働的な活動を意図的に仕組み、共感的な人間関係を築けるように工夫するとともに、友だちのことを認め、高め合える集団づくりを教科横断的に取り組む。
				・「自分は人の役に立っていると思う」と答える生徒の割合（昨年度79%）	85%	67%	69%	81%	B	生徒アンケート項目「自分は人の役に立っていると思う」「ボランティア活動に積極的に参加したいと思う」の２項目における達成値は69%であった。学年別で達成率をみると、１学年74%　２学年48%　３学年69%であった。２学年の数値の低さが目立つが、実際には2年生は多くの生徒が学校のボランティア活動に参加している。ボランティアに参加した生徒に対する教員の評価をもっと分かりやすく伝える必要があるのではないかと考える。					
	ふるさと御調に愛着をもち、未来の担い手となる生徒の育成	地域貢献意欲の向上	○地域の人材や教材の活用 ・総合的な学習の時間等で、地域と繋がりが深まるような活動の設定	・年間20回以上の，地域人材や教材の活用（昨年度16回）	100%	5回	26回	130%	A	・1月末現在、地域人材や教材の活用回数が26回であり、達成率は105%であった。学年別では、1年生6回（圃鍔デッサン会事前指導、圃鍔デッサン会、地域学習）、2年生3回（職場体験学習事前訪問、職場体験学習、立志式）、3年生17回（ええじゃんの着付け、まなびのとびら）であった。	8		2	・昨年度より取組が進んだと思う。立地、限られた時数の中で、よく対応したと思う。 ・愛着度に学年で違うことに興味がある。特に1年生と2年生で20%の差があること。3年生が取組を行ったことで1ポイントアップした事実にも大いに興味がある。 ・生徒個々の思いの違いがあると感じるが、地域教材・人材の活用の頻度による原因もあると感じる。御調地域の伝統芸能「みあがり踊り」への関わりも増やして欲しい。 ・地域とのつながりを持つことで御調のことを少しでも考えられるようになったことは成果である。 ・どのような体験が、愛着感につながっているのか具体的に知り、愛着を感じていない生徒に対して、どのような働きかけをすればよいか検討してもらいたい。 ・地域に関わる教材をたくさん取り組めている。 ・「まなびのとびら」の発表は素晴らしかった。 ・愛着を持つことはなかなか難しい。御調の良さを深められたら、卒業して御調を離れたとき、初めて愛着ができるのではないか。 ・指導者自身が地域人材や見学場所を知っておかないと活用は限られる。総合的な学習の時間については、御調中央小、御調西小と連携して取り組んでいくことが必要である。 ・「地域の人材や教材の活用」を方策としている以上、評価指標の「御調（地域）に愛着を持っている」という問いは、間口が広いものとなっているので次年度以降は再考をしてほしい。	・来年度も継続して、地域教材・人材の活用に向けて積極的に取り組む。そのために、学校運営協議会や小中連携などを有効に活用していく。また、指導者自身が地域人材や見学場所を知っておかないと活用が限られるため、人材や教材、過去の取組などをデータベース化するとともに、校内研修を行い共有化を図る。 ・評価指標について、方策と対応するように来年度再考する。。
				・「御調（地域）に愛着を持っている」と答える生徒の割合（昨年度78%）	90%	79%	81%	90%	B	・生徒アンケート項目「私は、御調に愛着をもっています」の肯定的評価が81%であった。学年別では、1年生93.5%、2年生71.4%、3年生78%であった。1年生と2年生は,前回とあまり変わらなかったが、3年生は前回より5.1ポイントアップした。これは、2学期に3年生は、まなびのとびらの取組を行い、地域人材の活用が活発にできたことが要因として考えられる。					
	教職員が笑顔で生徒の前に立てる、ワーク・ライフ・バランスの実現（働き方改革）	業務の効率化と業務改善への志向	○部活動時間の管理と複数顧問制の効果的な活用 ○業務改善のアイデア出し及び実行	・月の時間外勤務が80時間以下の教職員の割合	100%	81%（延べ42人）	88%（延べ114人）	88%	B	・80時間以下の教職員の割合は、88%であった。延べ16人が80時間以上の時間外勤務をした。月ごとでは4月が5人、5月が1人、6月が4人、7月・8月・10月が0人、9月・11月・12月が1人、1月が3人であった。後期は延べ6人が80時間以上の時間外勤務をした。教頭が1回、教務主任が3回、生徒指導主事が2回である。教務主任の担当授業時数は削減等しているが、依然として課題が残っている。教頭、生徒指導主事は何か事案が生起すると対応に時間を要した。	7		3	・日々多くの業務をしている中でも、今年度は特に子供に向き合う時間を確保してくれたことに感謝する。 ・子供と向き合う時間を大切にしながら、教職員の時間外勤務を減らすことの難しさは今後の課題である。 ・削減できる業務を見直して、「向き合う時間」をしっかり作って欲しい。 ・対人メインの仕事なので時間に追われて難しいと思う。 ・職員室では生徒を中心とした会話ができているといい。学級づくりや生徒指導について、気軽に相談ができる体制ができている。	・引き続き、実情に応じた業務改善策を考え、業務改善を進めるとともに、教職員の意識改革にも努める。具体的には、衛生懇話会において、各教職員の時間外勤務を把握、分析し、実情に合わせて具体的な業務改善策を考え、実行に移す。また、教職員が自らタイム・マネジメントできるような方策を実施する。
				・子供と向き合う時間が確保されていると感じている教職員の割合（昨年度82%）	90%	45.5%	80%	89%	B	・子供と向き合う時間が確保されていると感じている教職員の割合は80%であった。業務改善の取組が進んだことや「子供と向き合う時間」の定義の理解が深まったことが要因であると考えられる。ただし、目標には達していないため、「子供と向き合う時間」以外の業務を更に削減する必要がある。					・引き続き、子供と向き合う時間の確保に努める。逆に言えば、子供と向き合う業務以外の時間を削減し、教職員が子供と向き合っている時間と認識できるよう工夫する。

【自己評価　評価】
Ａ：１００≦（目標達成）　　Ｂ：８０≦（ほぼ達成）＜１００
Ｃ：６０≦（もう少し）＜８０　　Ｄ：（できていない）＜６０

【外部評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。